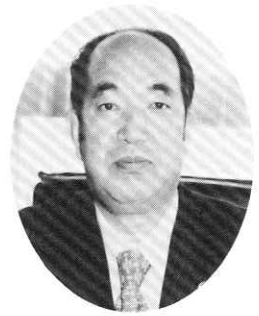


企画展

東嶺禪師展





## あいせつ

このたび、三島市において、東嶺禅師の遺墨展を開くことになりました。

三島市民の誇りとする名刹龍沢寺は、宝暦年間に創建された臨済宗の禅寺ですが、この建設にあたり、かの名僧白隠禅師とともに力を尽したのが東嶺禅師でした。

江州（現在の滋賀県神崎郡五個荘町）に生まれ、志を立て、全国各地を行脚の末にわが三島の地（伊豆沢地）に到達した時、東嶺は二十三才だったといわれます。無論、目的は、白隠に教えを乞うためでした。

東嶺という心強い弟子を迎え、二人は、この地を拠点に、ますます諸国教化に励んだと伝えられます。

「白隠あつての東嶺、東嶺あつての白隠」とは、後世の、二人の名僧に対する讃辞でした。このような偉人が、わが三島におられたということは、私たちの誇りであります。貴重な、心の財産とも言えるでしょう。本企画で集収、展示した東嶺禅師の墨蹟は、師の人格と禅風を彷彿させるものであります。二百年の歳月を経て、尚も、現代人に厳しく問いかけております。禅師二百年遠忌を間近にして、本展示が意義あるものであることを願う次第です。

企画準備にあたりまして、龍沢寺、松蔭寺、齡仙寺等の縁りの寺院をはじめ、飛驒の武川家など一般のみなさまにも多大な御協力を賜わり、今日の開館に至りましたことを報告申し上げます。感謝の意を表したいと存じます。

## 東嶺禪師の真面目

白隠禪師門下の二大神足として「大器遂翁微細東嶺」という名称がある。その名の示すがごとく東嶺禪師の御生涯は「年譜」を涙なくしては拜讀出来ぬ。

「師 歳十七 朝辛暮苦行クトキハ則チ直視又手 坐スルトキハ則チ半眼結跏ス、見ル者敬ヲ致シ 聞ク者襟ヲ正ス、自ラ古尊宿ノ風有リ」

「師 歳七十二 謹シンデ惟レバ師ノ生致 身ノ長ケ高カラズ 區頂隆準ナリ 眼流星ノ如ク舌血盆ニ似タリ 首メ發足超方シテヨリ身ヲ律シ 食ヲ節シ 長坐不臥ス 財利ヲ視ルコト塵土ノ如シ 欲境ヲ恐ルルコト虎狼ノ如シ……齒五十ヲ過ギテ勤苦度ヲ過グ 是ノ故ニ心火上騰シ血肉瘦削ス 衆医 更王候シテ之レヲ勉マシ行ヲ弛ラシム 二云云」

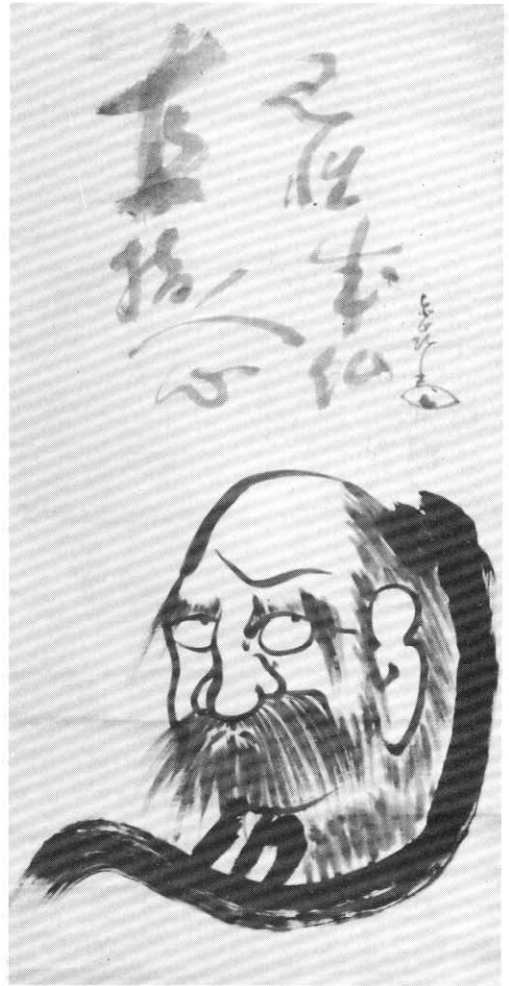
これは弟子大觀文殊の筆録によるものであるが、みずからの鞭でみずから打つ猛烈極まる捨身の修行底の真面目を如実に見る思いがする。

私は毎朝開山堂を巡堂する時、東嶺禪師筆の扁額「三光窟」を拜する。この筆致は寒毛卓立何人をも寄せつけぬ恐しい程の氣迫が満ちてゐる。三光とは日月星のことであり、東嶺禪師はそれを窟号として用いられ、そして又、三光とは神儒佛の光でもある。

「吾上宮太子ハ神儒佛三道ノ中興ニシテ常ニ日ハ 神八人ノ始ヲ教 儒八人ノ中ヲ教 佛八人ノ終ヲ教ルコトゾカシ 樹ノ根莖有テ枝葉有リ 枝葉有テ花果アリ 花果有テ又根莖ヲ生ズルガ如シ 神八根莖ナリ儒八枝葉ナリ佛八花果ナリ三道互ニ扶テ一箇道徳ノ大樹ヲ成スト云ヘリ」

このように神道儒教佛教三教一致論が東嶺禪師が著された「快馬鞭」に明示されているが、古来、神を拜し儒を尊び佛を信ずることに矛盾を感じることなく三位一体となつて行ぜられてゐるその奥底は、今日キリスト教の牧師がはるばるフランスから来日して接心するが如く世界の宗教がそれぞれの宗(執)我を離れれば、神もない佛もない我もない「這箇」を体得する時、そこに即座に浄土が現じ臨機應変自由自在に振舞い道を誤ることがないのである。凡そ禪の修行は終始一貫見性を離れるものではなく、修行に修行をつみ迷悟をも忘れはて、見性を々底の閑古錐の境涯、自然法爾の遊化三昧に於いて、折にふれてものされた東嶺禪師の破格な墨痕にカテゴリーはいらぬ、禅僧の墨痕に巧拙を論じてはならぬ、美醜を超え形式を脱しておる。それが又、成所作智無限の妙甲となつて露堂々、今なを日月星の輝きをもつて時間空間を超え東嶺禪師が家風が永劫に消ゆることのないことを確信して止まぬ、諸人がここに無限の法悦が醸し出されていることを感ずることが相見報恩底であり法幸の極みといべきか。

主なる作品



▶ 達磨 図

▼ 「忍」



●企画展 『東嶺禪師展』 図録

■編集 / 三島市郷土館 ■発行 / 三島市教育委員会